

北陸石仏の会々報

富山市の石分銅

平井一雄

一、江戸時代に広く展開する石仏・石塔以前の石造物に石分銅がある。最古は弥生時代のもので発掘されているが近世は石分銅にかわり字の通り鉄・銅など金属で造られた分銅が使われている。

富山県富山市八尾町水谷の私立民具館に寄託展示していた平井一雄所蔵「石分銅」二個引き取ってきました。

①富山市月岡石田のS宅庭園にあったものを更地になるというのももらってきた。

②富山市八尾黒田の親戚に竹竿・ハサギ横置たばね用八番線のおもりになっていたのをもらってきた。
いずれも出土地は不明。

法量

①、釣鐘形高さ二十二センチ直径十二センチ最小幅十センチ重量六・〇キログラム

②、釣鐘形高さ十三センチ直径十三センチ最小幅十センチ重量五・五キログラム

二、天秤秤（てんびんばかり）と分銅（ぶんどう）

天秤秤とは質量計器の一種。てこの原理を利用して質量を量りたい物体と錘（おもり）とをつりあわせることによって、物体の質量を測定する器具（秤）をいう。天秤による測定の基準となる錘（おもり）を分銅という。分銅は金

属の塊を円柱形などの形にしたもので質量基準となる金属塊。

石分銅・てんびん秤・台秤写真資料

三、越中の石分銅

高瀬保『加賀藩流通史の研究』に越中に伝来する石分銅の研究がある。呉東の経田。水橋・飯野・奥日の四カ所、呉西の東保。金屋・井口。若杉・福光・五箇山の九カ所にて伝来。発掘された計一三箇は南砺に集中しているが、また海岸・平野。そして山へと分布していることが特色である。

『加賀藩流通史の研究』 P50

一例として富山市八尾町奥田に居住する田近家は、奥田村又兵衛を襲名した旧家で、現当主秀男氏は一六代とされている。田近家に残る由緒古文書から元和から寛永期に又兵衛は精力的に奥田野の新開にあたったことがわかる。田近家に御蔵米をはかる五斗俵枠の石分銅が伝来した。分銅の石質は安山岩で重さは五・八キログラムである。形状は釣鐘形で、高さは一七・六センチ、直径は最大幅一八・五センチ、最小幅六・一センチである。

しかし管見の限りにおいて佐々成政、前田利家利長に関わる年貢算用状はすべて、枡が使用されていて、秤によるものが皆無であり、加賀藩領内の京枡の使用は文書からみる限りにおいて文禄二年からである。したがって田近家伝来の五斗俵秤の石分銅の使用した時期はにわかには特定できない。現当主の父（義信）が子供のころ、天秤の目盛をした棒も伝来したという。この石分銅は慶長・元和・寛永期、一七世紀の早いころのものとなる。

参考『加賀藩流通史の研究』平成二年四月発行

第71号

令和5年12月15日発行

編集と発行

北陸石仏の会

(日本石仏協会北陸支部)

代表 平井一雄

〒939-1315

富山県砺波市太田

1770 尾田武雄方

電話 0763-32-2772

振替 00740-2-11974

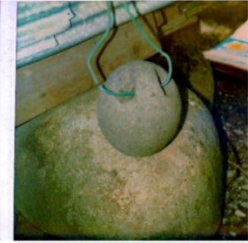
(年会費 3000円)

ホームページ

<http://odatakeo.wp.xdomain.jp/>

- ・富山市の石分銅
- ・井波石工七次郎
- ・金沢市の一石六地藏
- ・第65回例会報告

石分銅 てんびん秤 台秤 写真資料



①富山市石田 ②八尾黒田 石分銅

富山市八尾N家
②石分銅



田近家の石分銅
『加賀藩流通史の研究』より



②富山市石田 s家 庭石
左①石分銅
右 梵字 イー(金剛賣地藏)板碑

『加賀藩流通史の研究』P50

5表 越中に伝来している石分銅

伝統工芸村の石分銅	伝統工芸村のい石分銅	五箇山民俗館蔵石分銅	五箇山民俗館蔵い石分銅	高野家石分銅	吉江家石分銅	城端町中央公民館蔵石分銅	前川家石分銅	山岸穀家石分銅	了安家石分銅	石崎治家石分銅	田近家石分銅	西山家石分銅	蔵石分銅	水橋郷土史料館附属民俗資料室	寺口家石分銅	形状	重さ(kg)	高さ(cm)	最大径(cm)	最小径(cm)	摘要
釣鐘型	釣鐘型	偏平丸石	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	扁平釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	釣鐘型	九・五	二一・七	一八・三	一七・二	花崗岩
																	五・五	一五・三	一五・七	一五・三	安山岩
																	五・〇	六・〇	二二・〇	二二・〇	花崗岩・網目袋入り
																	二・五	一六・五	一四・三	一四・二	凝灰岩
																	四・七	一六・五	一四・三	一四・二	安山岩
																	五・八	一九・八	一五・二	一四・五	凝灰岩
																	五・三	一八・五	一六・一	一六・〇	凝灰岩
																	三・二	七・六	一二・三	一一・五	凝灰岩
																	二・七	一四・一	一四・五	一〇・六	安山岩
																	四・〇	一三・六	一三・四	一三・〇	砂岩
																	三・〇	一三・三	一三・三	一三・二	安山岩
																	五・八	一七・六	一八・五	一六・一	安山岩・摩耗
																	六・一	二〇・五	一五・〇	一三・三	安山岩・摩耗
																	六・二	一五・九	一七・二	一七・〇	安山岩
																	六・二	一二・五	一六・〇	一五・五	安山岩



てんびん秤二種類



台秤

井波石工 七次郎

尾田 武雄

井波石工の存在については井波町編『井波町肝煎文書目録 古文書』（昭和六十年刊）に「町中末々困窮に付助成願書」（三〇頁）が載せられ『井波町史 下巻』（二一三頁）に全文転載されている。享保一八年（一七三三）三月に仁右衛門他二〇名が肝煎・組合頭・算用聞に対し、石山希望者に一五〇匁の役銀とひきかえで採掘させたものである。以後採掘権は、特定の人に与えられ売買の対象になった。それから延享元年には砺波市三合新の千光寺石塔が建立され、「石工井波善太郎」の銘が刻まれている。天明五年（一七八一）には、新たに石山を開き、北川村の石屋善太郎に一年銀二十匁で採掘権を与えた。文化三年（一八〇六）には「石工四人御座候」（『井波肝煎文書』）とあり、文化七年（一八一〇）には石山の採掘者は、甚右衛門、かじ屋又兵衛、義右衛門、清次郎、平蔵がいる。（『井波肝煎文書』）

富山県南砺市井波の隣地区に砺波市庄川町金屋がある。ここは石仏制作の祖とされる庄兵衛が越前国の石工について仏彫刻の修業をしたのが文化十四年（一八一七）とされ、一生の間に一千体の石仏を作った明治の名工がいて、石仏の里のような感があるが、金屋石工より先行して井波石工がいたのであると想像できる。

石仏に関しての在銘は、南砺市今里の神明宮に不動明王があり背面に「井波石工七次郎」「慶應二丙寅年正月」とあり幕末期の製作である。また南砺市福野の曹洞宗準堤寺には、秋葉大権現、金比羅大権現、不動明王を刻んだ石龕があり、横に「作井波石工七治郎」「慶応二年正月」（現在は、お堂に入り確認することができない）がある。また高岡市戸出町四丁目には坐像ながら高さ二四〇センチ、幅一二四センチの通称「デカ地藏」といわれる阿弥陀如来坐像が大きいお堂に安置されている。お堂の前には石柱に「南無古中大地藏菩薩」と彫られ、やはり石の由来板によると「安政六年（一八五九）から

文久二年（一八六二）にかけ当地方に疫病が流行して止まることを知らず多数の病死者をだした。特に幼児が多く其の悪病退散を祈願し且供養の為に、古戸出村左官三吉 中之宮村桶沢又七が發起して大地蔵尊並びに尊堂の建立を呼びかけ町内住民競って浄財を持ち寄り井波町石工七次郎に石仏を依頼した。慶応三年（一九二三）五月大石坐像を完成した」とある。井波石工七次郎は慶応年中頃に活躍した石工である。この幕末期から明治期にかけて、砺波地方では石仏の造像がされるようになる。



③釈迦如来 砺波市庄川町小牧 路傍



①石龕 南砺市福野 準堤寺



④阿弥陀如来 高岡市戸出4丁目 路傍



②不動明王 南砺市今里 神明宮

金沢市の一石六地藏

滝本 やすし

私が在住する石川県金沢市に、横長長方形の石材に浮彫りされた六地藏がみられる。彫りくぼめた前面に六地藏が横一列に並んで浮彫りされており、上面が平なものと、緩やかなカーブのものがみられる。また三体ずつ二石に彫られたものや、四体と二体に分けて彫られたものもみられ、これらも併せて紹介したい。

①金沢市東山二丁目 日蓮宗蓮昌寺墓地 明治九年(一八七六)

蓮昌寺墓地の板垣家墓所に、凝灰岩製の一石六地藏が置かれている。持物は左から、幡、蓮華、不明、念珠、合掌、錫杖である。裏面に「明治九年第一月建之／板垣母」と刻まれている。

②金沢市旭町三丁目 共同墓地 明治年間

共同墓地の入り口に、凝灰岩製の一石六地藏が置かれている。この共同墓地は現在の倍ほどの広さで墓標が点在していたが、平成初期に整備された。六地藏の持物は左から、幡、錫杖、宝珠、柄香炉、合掌、念珠である。裏面に「明治廿八年／釈尼妙喜／八月三十日」「明治廿八年／釈行願／九月十一日」「明治廿九年／釈教信／六月二十九日」、右側面に「本村／駒谷七左衛門」と刻まれている。

③金沢市小立野五丁目 鶴間坂路傍

鶴間坂は旭町(旧牛坂村)から小立野五丁目へ登る狭い坂道で、平成中頃に車の通行が禁止された。諸説あるが、藩政期には牛坂と呼ばれ、明治初頭に鶴が舞う坂として鶴間坂に改称されたと伝えられる。

坂の中ほどに、数体の石仏と共に凝灰岩製の一石六地藏が置かれている。旭町の町名の由来は、石龕内に納められている旭観音による。六地藏は、剥落が激しく持物を特定できない。この場所には土牢があつて処刑場とされていたと伝えられるが、確かな記録は残されていない。

④金沢市大桑新町 大桑不動明王尊境内

小立野台地から犀川へ流れる辰己用水の分流の脇に大桑不動明王尊堂が建てられており、高さ二メートルほどの丸彫りの不動明王が納められている。

一石六地藏は隣の堂内に納められており、凝灰岩製であるが、蠟燭の煤で全体に黒ずんでいる。持物は左から、念珠、柄香炉、錫杖、合掌、幡、蓮華である。

⑤金沢市堀川町 曹洞宗久昌寺地藏堂左

久昌寺本堂左手に地藏堂が建てられている。仕切りの左側には赤戸室石製の大きな丸彫り六地藏が並んでいる。このうちの二体に元禄十六年と寛永五年の銘が刻まれており、他の四体もその後続けて造立されたとされている。一石六地藏は、仕切りの右側に二基納められている。

左の一石六地藏はシルト岩製で、長期間露座で置かれていたのであろうか剥落が激しい。持物は左から、幡、柄香炉、宝珠と錫杖であるが、右の三体は持物を特定できない。

⑥金沢市堀川町 曹洞宗久昌寺地藏堂右 嘉永四年(一八五二)

右の一石六地藏は凝灰岩で、剥落は少ない。持物は左から、幡、蓮華、柄香炉、宝珠と錫杖、念珠、合掌である。右側面に「嘉永四亥年三月四日」と刻まれている。

⑦金沢市円光寺二丁目 曹洞宗覚心院境内 寛政元年(一七八九)

覚心院本の堂左手前に凝灰岩製の一石六地藏が置かれている。台石に載せられているが、この台石は別のものを転用している。

六地藏の持物は左から、幡、宝珠と錫杖、蓮台、柄香炉、合掌、念珠である。左側面に「寛政元年酉三月立之」と刻まれている。

⑧金沢市旭町三丁目 義堅院青雲寺地藏堂 文化十四年(一八一七)

青雲寺は真言系の単立寺院。鶴間坂の下に位置しており、境内奥の石段を登ると鶴間坂の途中へと出ることができる。

入り口左手の地藏堂内に、三体ずつ凝灰岩二石に分けて彫られた六地藏が納められている。左の三体の持物は左から、宝珠と錫杖、蓮華、念珠であり、

右の三体の持物は左から、柄香炉、幡、合掌である。二基共に前面右に「文化十四丁丑年」、前面左に「三月吉日」と刻まれている。

⑨金沢市寺町五丁目 浄土宗浄安寺観音堂

浄安寺境内に観音堂が建てられており、その中に四体と二体に分けて細粒砂岩に彫られた六地藏が置かれている。四体と二体とは手法が若干異なっていることから、別々に造られたものである。四体の持物は左から、合掌、念珠、宝珠、柄香炉であり、二体の持物は左から、蓮台、合掌である。石造観音は天保二年に真言宗理証院に造立され、明治二年に廃寺となった際に浄安寺へ譲渡された。六地藏も理証院から移されたものかは不明である。

⑩金沢市中央通町 浄土宗法船寺墓地

法船寺墓地の無縁墓標群内に、三体ずつ凝灰岩二石に分けて彫られた六地藏が置かれている。左の三体の持物は左から、幡、宝珠と錫杖、蓮台であり、右の三体の持物は左から、柄香炉、合掌、念珠である。間を詰めて置かれているので、側面や裏面を確認できない。

⑪金沢市子来町 高野山真言宗宝泉寺墓地

宝泉寺墓地内に、三体ずつ凝灰岩二石に分けて彫られた六地藏が置かれている。左の三体の持物は左から、蓮華、合掌、念珠であり、右の三体の持物は左から、幡、柄香炉、宝珠と錫杖である。



①東山2丁目 日蓮宗蓮昌寺墓地



②旭町3丁目 共同墓地



③小立野5丁目 鶴間坂路傍



⑧旭町3丁目 青雲寺地藏堂左



⑦円光寺2丁目 曹洞宗覚心院境内



④大桑新町 大桑不動明王尊境内



⑧旭町3丁目 青雲寺地藏堂右



⑨寺町5丁目 浄土宗浄安寺観音堂



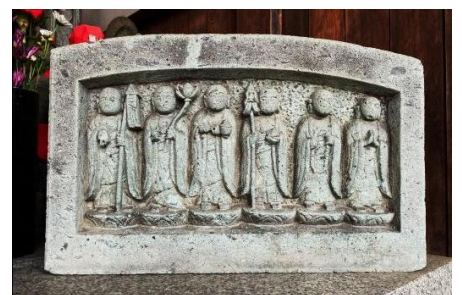
⑤堀川町 曹洞宗久昌寺地藏堂左



⑪子来町 高野山真言宗宝泉寺墓地



⑩中央通町 浄土宗法船寺墓地



⑥堀川町 曹洞宗久昌寺地藏堂右

第65回例会報告 金沢市の不動明王めぐり

清水 邦彦

二〇二三年(令和五)一〇月一五日に行われた北陸石仏の会第65回例会「金沢市の不動明王めぐり」に参加させていただいた。この時の感想等を、当日配布された資料(滝本やすし作成)を参考に述べる。当日は雨模様の手報であったが、昼食時間を調整し、なんとか雨を避けることができた。

まず確認すべきは、今回見学した範囲において、不動明王を祀っている場所が、1水源の側、2寺院の境内(ただし、本堂ではない)におおよそ二分されることである。

1. 水源の側

1に当たるのが、①市杵嶋神社(柳橋)、②加茂神社(御所町)、③鹿島神社(鳴和滝(鳴和町))、④常盤滝(常盤町)、⑤馬坂(宝町)、⑥大桑新町、⑦法島町、⑧清川町、⑨三尊ヶ池(長田町)の九箇所である。いずれも右手に剣、左手に縋索(縄)を持っており(あるいはかつては持っていた)、形態的にはまごうことなく不動である。不動が水源の側に祀られることは『広説佛教語大辞典』・『日本の神仏の辞典』・『日本民俗宗教辞典』・『日本民俗大辞典』等に記述がない。水源の側に祀られる不動は金沢市限定なのか、他地域にも普通に見られるものなのか知りたいところである。というのも仏教系の水源の神としては弁才天が一般的だからである。有名どころとしては、神奈川県鎌倉市佐助にある銭洗弁才天が挙げられる(1)。

常盤滝手前の祠に木造の不動像が祀られている。見た所、かなり新しいものである。政治家奥田氏の造立と伝わる。奥田敬和(衆議院議員・自民党↓新生党↓新進党)であれば、一九二七年(昭和二)生まれ、一九九八年(平成一〇)逝去である。この不動像に価値がないとは言わないが(昭和もしくは平成になっても仏像が造られる意味は考察する価値がある等)、滝の上の祠

にも不動像が祀られている。この像こそ、もともと当地にあった不動像と考えられる。滝の左手には行者祠があり、当地はもともと修験道の修行場であったと想定される。

市杵嶋神社・加茂神社・鹿島神社、いずれも神社ではあるが、不動像を祀っている。これらの神社で不動像を祀ることが、神仏習合が当たり前であった江戸時代(もしくはそれ以前)に遡るものなのか、それとも明治の廃仏毀釈が沈静化した時期(2)以降なのか。これらの神社の立地場所は、もともとは修験道に関連した場所だったのか、それとも修験道と無関係の神社なのか。本節冒頭で示した問題と合わせて、今後の課題としたい。

水源とは無関係だが、今回見学した箇所のうち、若松八幡神社(若松町・奥卯辰山の南)でも不動像を祀っている。ただし、この不動像は、一九九一年(平成三)に造立されたものである。

三尊ヶ池不動尊(長田町)は、民間アパートの側にぽつんとあり、たどり着くには困難を極めた。もともと田畑にあったものである。住宅地となっても地元の方々が祀り続けていることには感謝したいところだが、もう少し分かりやすい案内板が欲しかった。三尊ヶ池不動尊(長田町)の不動堂には不動像二体・馬頭観音一体が祀られている。

2. 寺院の境内(ただし本堂ではない)

2に当たるのが、①宝円寺(宝町・曹洞宗)、②永福寺(寺町・浄土宗)、③善隆寺(寺町・日蓮宗)、④覚心院(円光寺・曹洞宗)の四箇所である。宝円寺はもともとの予定に入っていなかったが、時間に余裕があったため、馬坂に行ったついでに見学することとなった。いずれも形態的にはまごうことなく不動である。不動は密教系の明王であり、曹洞宗・浄土宗・日蓮宗いずれの教義でも積極的に祀るものではない。しかし、地方の小寺院であれば、様々な要素を受容するのは当たり前のことである。

宝円寺の古い境内図では、現在、不動堂と呼ばれている場所には烏枢沙摩明王を祀る堂があるとする。しかし、現在、不動堂には不動像しか祀られてい

ない。後日、宝円寺に電話をしたところ、「現在、烏枢沙摩明王は本堂の東司（便所）に祀っている」とのことであった。

永福寺の不動像は左右に矜羯羅童子・制咤迦童子（こんから せいいたか）を従えている（不動三尊）。善隆寺の不動像は線刻（石に線を刻んだもの）である。

覚心院に不動像は三体祀られている。うち一体にはかなりずさんな修復が施されており、正直、無惨なお姿であった。

3. 一石六地藏

不動像以外の石像も幾つか拝見した。そのうち特に貴重なものとして、一石六地藏（一つの石に六地藏を刻むもの）が挙げられる。今回、旭町三丁目の共同墓地入り口、覚心院境内、大桑新町（不動堂内）の三箇所の一石六地藏を拝見することができた。覚心院の一石六地藏は銘文に「寛政元年 西 三月立之」とあるので、一七八九年（寛政元）造立と想定される。なぜ一石六地藏の事例が貴重かというと、全国的に見て一石六地藏に関する先行研究はほとんどないからである。Cini Researchを検索しても〇件である。日本石仏協会編『日本の石仏 項目別分類索引』（二〇〇一〜二〇一七年）全三冊を見ても、一石六地藏を含んだタイトルは、管見の及ぶ限り中森勝之「台座から地藏尊頭部が見つかった 一石六地藏」『日本の石仏』第一二八号、二〇〇八年）の一件のみである。現在、滝本さんが金沢市の事例をまとめている最中と聞いているので、まずは滝本論考の公刊が望まれる。

今回、拝見することのできた石仏は、いずれも文化財指定されているものではないが、貴重なものである。石仏を祀り続けることには時に労力・財力が必要であるが、今後も地元の方々によって祀られることを切望する。

註

(1) 銭洗弁天については拙稿「銭洗水から銭洗弁天へー銭洗弁天（鎌倉市佐介ヶ谷）の信仰史」『歴史民俗資料学研究』第二号、一九九七年）参照。



三尊ヶ池不動尊の内部



市杵嶋神社境内の湧水と不動明王を祀る石祠



馬坂不動尊全景



加茂神社境内の湧水と不動明王

(2) 廃仏毀釈は、一八七一年（明治四）頃には沈静化したとされる（末木文美士『日本宗教史』岩波新書、二〇〇六年、一八一頁）が地域によってはその後も続いている。例えば石川県によって白山から仏像が撤去（一部は破壊）されたのは、一八七四年（明治七）である。拙著『お地藏さんと日本人』（法藏館、二〇二三年）一五八〜一五九頁参照。



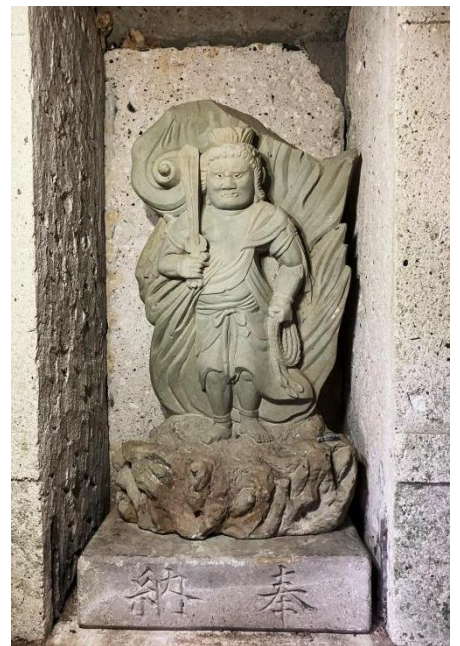
永福寺境内の不動三尊



法島不動尊



善隆寺境内の線刻不動明王



鹿嶋神社境内の鳴和滝不動尊



清川不動尊にて記念撮影



大桑不動明王尊